

平成 26 年度 追手門学院大手前中・高等学校 学校評価

1 めざす学校像

教育理念「独立自彊・社会有為」を体現する「人財」育成をすべての教育活動の根本とする。  
また、すべての生徒が自己の成長と周りへの貢献を意識して、満足した学校生活を送り、希望の進路実現を果たせる学校づくりを進める。  
そのために、  
① 自ら学び、考え、他者と共に成長する生徒  
② 未来を切り拓くたくましさ・高い志・品格を備えた生徒  
を育成する。

2 中期的目標

1. 教育理念の捉え直しをし、その実現のために必要な教育内容を明確化する。
  - (1) 時代に照らして理念の「現在化」を図り、生徒に獲得させたい力を明確化する。
  - (2) (1)の力をつけるために必要な教育内容の検討とその準備・実践を進める。
  - (3) (1)(2)を教職員に浸透させ、日常の教育活動に活かす。
2. 教育力の向上のために組織的に取り組む。
  - (1) 学校評価・教員評価・研修の三位一体の取り組みを実践し、学校力・教育力を向上させる。
  - (2) 授業力向上のための部署を設置し、定例の教科主任会議等を活用して組織的に「学び」の改善に取り組む。
  - (3) カウンセリングマインドを持った生徒指導と支援の方法を研究し、全校で実施する。
3. 生徒の学力向上と人格形成の両面の取り組みを展開する。
  - (1) 全学的に在校生の学力を伸ばす方法を考え、学びの改善につなげて、追手門スタンダードを確立する。
  - (2) 学びを科学的に捉え、反復・定着の方法や「学び方を学ぶ」意識を生徒に定着させる。
  - (3) 学びを支える生徒指導・支援により、生徒のセルフイメージを高め、積極的・主体的な学校生活を送らせる。
4. 学院内での連携をさらに進め、教育力の向上につなげる。
  - (1) 大学と連携し、追手門コースの教育内容のさらなる充実を図る。
  - (2) 大学および他校園の教員との交流をさらに深め、具体的・継続的な取り組みに発展させる。学生・生徒・児童の交流も進める。
  - (3) 茨木中・高との定期的な交流・研修を検討し、相互の教育力向上につなげる。

【自己評価アンケートの結果と分析・学校評価委員会からの意見】

自己評価アンケートの結果と分析 [平成 26 年 11 月実施分]	学校評価委員会からの意見
<p>○生徒 ・担任指導での満足度が高く、今年度から導入した生徒指導・支援の在り方への共感性が高い。特に規律面では昨年度より大きく向上。 ・学習面での満足度も昨年度より向上が見られた。</p> <p>○保護者 ・生徒と同じく、担任の指導や規範・礼法指導について満足度が高い。 ・セキュリティ一面での満足度は前年度に続いて高い。</p> <p>○教職員 ・教え方の工夫などの学習面での取り組みで自己評価が向上。 ・規範・礼法教育での自己評価が大幅に向上した。</p> <p>【分析】 ・生徒の評価に比べて、保護者評価が低い項目が見られた。実際の取り組みが保護者にしっかりと伝えられていないことが考えられる。メール配信や直接の電話連絡等、工夫しており、担任から保護者への連絡についても、保護者の満足度は高いが、詳細にわたる取り組みの伝え方について、HPの活用など、さらに工夫する必要がある。また、追手門学院小学校や大学との連携をさらに進め、低学年次より、進路に関する情報提供をしていく必要がある。</p>	<p>○学校では様々な取り組みをしてもらっていて、ありがたく思っている。保護者への伝わり方には差がある。説明会等に参加されない保護者もおられるので、伝え方の工夫をしてもらいたい。 ⇒HPやメール配信の面での工夫を考えると回答する。</p> <p>○追手門学院大学の教学面での改革に対する評価が保護者の間でも高まっている。大学の様子を高校からではなく、中学校段階から生徒・保護者に伝えてもらいたい。 ⇒今までPTA総会など、多くの保護者の方が集まる場で追手門学院大学の説明をしてきたが、確かに高校が主な対象だったので、中学の保護者の方にも伝わるように取り組みを工夫すると回答する。</p> <p>○追手門学院小学校との教育的接続をさらに明確にして教育を進めてほしい。保護者の中には、小学校に入れば、その後は大手前の中・高、さらには追手門学院大学にまで通わせたいという希望の人も少なからずいる。その期待に応えてほしい。 ⇒総合学園として、理念・教育方針を含めて受け継いでいる部分も多い。それを明確にして、教育活動を行うと回答する。</p> <p>○生徒は多くがきっちり挨拶をしてくれる。細かい規律面の指導は難しい面があるが、先生方の指導のラインをさらに統一してもらいたい。 ⇒生徒指導と学年、さらには学年内でのライン合わせをして、指導に取り組むと回答する。</p>

3 本年度の取組内容及び自己評価

中期的目標	今年度の重点目標	具体的な取組計画・内容	評価指標	自己評価
1 理念に即した教育	<p>(1) 理念の浸透</p> <p>(2) 理念に即した教育内容の検討と準備・実践</p> <p>(3) 教職員への浸透</p>	<p>(1) 理念の「現在化」と獲得させたい力の明確化 ア 時代を生きる力・獲得させたい力を明確化 イ 理念とのつながりで教育内容を検討</p> <p>(2) 必要な教育の取り組みの検討と制度整備 ア 獲得させたい力のための、教育内容を明確にする。 イ 教育を実践するための準備と実践を部署を通じて組織的に進める。</p> <p>ア 教職員への浸透 イ 生徒への浸透、自校教育の推進</p>	<p>(1) ア 時代の分析・獲得させたい力を明確化 イ 具体的な教育内容への落とし込み</p> <p>(2) ア 教育内容を決定 イ 担当部署からの進捗状況報告・決定内容の共有</p> <p>(3) ア 学校案内等での教職員への浸透、自校教育の取り組みを共有化 イ 職員会議・各種主任会議等での確認と実践、その報告と共有 →教員の意識調査</p>	<p>(1) ・獲得させたい8つの力（解決力・思考力・俯瞰力・創造力・コミュニケーション力・表現力・協同力・貢献力）を定めた。 ・具体的な教育内容を検討・決定。</p> <p>(2) ・8つの力から、5つの教育を決定した。理念→理想の学校像・生徒像→8つの力→5つの教育のつながりを整理した。 ・準備・取組の報告会や職員会議で進捗状況と成果を確認できた。</p> <p>(3) ・学校案内等を用いて、8つの力・5つの教育を教職員に浸透させ、理念に対する意識が高まった。成果を出すことへの意識の向上が課題である。 ・組織的取り組みにより、優れた実践の共有や進捗状況の確認ができた。</p>
2 教育力向上の取り組み	<p>(1) 教員評価・学校評価・研修の三位一体の制度による教育力向上</p> <p>(2) 学びの改善に組織的に取り組む</p> <p>(3) 生徒指導のありかたを研究・改善</p>	<p>(1) 教員評価・学校評価・研修を通じて教育力＝学校力を向上させる ア 評価の目的・意義と有効な目標管理の方法を組織として浸透させる。 イ 中間点検の実施とアンケート評価に基づく年度内改善。教科研修の実施。</p> <p>(2) 部署の設置・業務の見直し、取り組み方法の改善 ア 学習推進部の設置、定例の教科主任会議開催 イ 「質の高い学力」教育の内容を各教科で設定、実践。研究誌『はくる』での実践報告。</p> <p>(3) ア カウンセリングマインドを持って生徒指導にあたる取り組みを組織的に研究・展開 イ 専門家を招いての研修会を実施、優れた実践を共有する。</p>	<p>(1) ア 主任会議・職員会議等での浸透、研修実施 イ 中間段階でのチェックを実施、アンケート評価</p> <p>(2) ア 部署の設置、会議開催 イ 学校評価アンケート満足度向上、研究誌『はくる』の発行</p> <p>(3) ア 共通の方法論を持って取り組む。 イ 教員向けの研修を実施</p>	<p>(1) ・教員評価・学校評価の目的・意義について各種会議を通じて浸透させることができた。 ・教員自己評価向上 ・中間段階でのチェックをさらに徹底して実行し、すぐに改善につなげる事が課題。</p> <p>(2) ・学習推進部を設置し、教科の枠を超えた学習の取り組みができるようになった。教務部・進学指導部との棲み分けが課題である。 ・担任指導については、生徒の満足度は向上し、調査開始以来最高。 ・学習指導面での満足度は上昇。</p> <p>(3) ・共通の方法論をもって取り組み、生徒との接し方が大きく変わった。 ・外部講師を招いての研修・学内での実践報告会を実施できた。 ・さらに今の方法を浸透させることが課題である。</p>
3 学力向上・人間形成の取り組み	<p>(1) 全校生徒の学力伸長、学びの改善</p> <p>(2) 学びを科学的に捉え、効果的な方法で学習を進める</p> <p>(3) 学びを支える生徒指導・支援の取り組みを展開する</p>	<p>(1) 全校生徒の学力伸長 ア 教科・学習関係の分掌・学年が連携し、組織的に学力伸長に取り組む。 イ 教科内での6年間にわたる指導法検討・整備</p> <p>(2) 学びの方法を確立、生徒に浸透させる ア 反復・定着の効果的な方法を生徒に伝え、実践させる。各教科授業での実践。 イ 知識の活用や考えの発表・共有などを通じて、学びを深める。大学入試改革で要求される学力への対応も進める。</p> <p>(3) 学習生活の礎としての生徒指導法研究・実践 ア 学習生活の基盤となる規範・礼法教育を強化。 イ 「ほめ言葉のシャワー」教育の実践を通じて、生徒のセルフイメージを高める。「ほめ言葉のシャワー」教育・アドラー心理学への理解を深め、本校での取り組みの基盤を作る。</p>	<p>(1) ア 進学指導主導の学力分析会の実施。 イ 教科内での学力層別指導法確立・共有</p> <p>(2) ア 各教科で方法を確立、全体での共有化。 イ 新たな学びの方法・授業内容・評価方法の研究を進める。</p> <p>(3) 学校評価アンケート ア 全校集会の講話、「生徒指導便り」の発行、毎日の挨拶運動実施 イ 外部講師を招いての研修、教育実践共有</p>	<p>(1) ・模試分析会の実施、会議での情報共有ができた。 ・授業コーチによる授業改善の取り組み開始。各教科内に授業コーチができる教員を育てることが課題である。</p> <p>(2) ・脳科学の知見に基づいて教科ごとに記憶の定着法を検討・実践することができた。 ・基礎学力の定着に加え、新たな学びの方法を研究し、それに対応した授業展開の研究を進められた。学習面での生徒の満足度向上。 ・継続的な取り組みが課題である。</p> <p>(3) ・年間を通じて実践できた。 ・主に中学において研究を進め、実践し、職員会議で実践報告ができた。生徒指導面での学校評価の生徒満足度が上昇 ・テーマに関わる第一人者の方を招いての研修を実施できた。 ・確かな方法の確立が課題である。</p>

<p style="text-align: center;">4 一貫連携教育</p>	<p>(1) 追手門コースを始めとした、大学との連携事業の推進・改善</p> <p>(2) 追手門学院小学校との連携・交流を深める</p> <p>(3) 追手門学院中・高との連携・交流を深める</p>	<p>(1) 高大連携強化 ア 高大連携推進チームを設置し、追手門教育の浸透と内部進学者増を図る。 イ 追手門コースの総括と今後の取り組み計画。</p> <p>(2) 追手門学院小学校との連携強化 ア 小学校卒業生に関する情報交換。 イ 小学校の授業参観、小学校の教育内容の研究と、授業、クラブ活動等での交流。</p> <p>(3) 追手門学院中・高との連携強化 ア 教科の取り組み内容での交流  イ 分掌の取り組みでの情報交換</p>	<p>(1) ア AP科目受講の制度設計、取り組みの打ち合わせを綿密にして内部進学者数増を図る。 イ 総括と今後の展開を検討</p> <p>(2) ア 学期に1回程度 イ 公開授業参加、小学校の教育との接続を明確化、授業・交流会の実施</p> <p>(3) ア 教科交流会の実施  イ 分掌の取り組みでの情報交換の実施</p>	<p>(1) ・前年度よりAP科目の開校科目数が大きく増え、最大で4科目単位修得ができた。生徒の満足度も高く、積極的な姿勢で大学生活をスタートできた。 ・内部進学者数は昨年度より11名増加。 ・これまでの追手門コースの総括をし、今後の展開を継続的に検討することが課題。</p> <p>(2) ・情報交換は、年度初めと中学入試前に2回実施。 ・公開授業に参加。さらに参加人数を増やして教科交流を図ることが課題である。</p> <p>(3) ・一部教科での実施はできた。70周年での取り組みに向けて、教育内容での交流を活発化させることが課題である。 ・生徒募集面での情報交換を計画したが、実施できなかった。次年度への課題である。</p>
---	--	--	---	--